



TITLE:

花山だより(十月)

AUTHOR(S):

星見山人

---

CITATION:

星見山人. 花山だより(十月). 天界 1934, 15(164): 54-54

ISSUE DATE:

1934-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166926>

RIGHT:

## 花 山 だ よ り (十 月)

風害應急處置は大體九月中で一段落したのであるが、唯一つ残つてゐたのは30種クツクが雨曝しになつてゐた事である。尤もホントの應急として毛布や小さな防水布で重要な所は包んでゐたが筒等は雨が降るとビショ濡れになつてゐた。それがやつと注文して置いた5米と3米の長さの防水布が出来上つて、筒と極軸並に時計仕掛の全部が保護される事になつた。更に9日から、營繕課の手で應急修理として大ドームの剥ぎ取られた亜鉛板の代りに、防水布を張つて呉れたのでやうやく雨水が防げる事になつた。併し見かけはあまりよくなく、今までの鐵兜がヘルメットに變つた感じである。20日に望遠鏡の掃除、油差等大手入れを行つた。本月に入つてからの被害調査其他を引記すると次の通りである。1日、本部より風害箇所撮影に來臺。3日事務室よりの依頼で龜井氏は雨の降る中を天文臺附近の風害撮影。4日瀬田川鐵橋上に列車轉覆の調査材料として檢事局より花山の風速問合せあり、10日營繕課長の案内で文部省より2名被害調査に來臺。26日東京帝大より4名來り森林被害調査のため露臺より遠景撮影。

尙、之れ程の被害を受けた記念(?)に、氣象の話を聞かうと言ふ事になり、本月の常識講座には地球物理學教室の滑川先主に御願して、6日に颱風の話をして頂いた。常より少し早かつたが14時から始めて17時頃まで、協會創立發起人の一人である先生から、颱風の新學說やら先生独自の御意見やら今回の颱風の御感想伺つて、大いに得る所があつた。

20日には花山で協會の總會が開かれた。盛會であつて、議事と講演會が終ると討論會となり、天文用語に就いて大いに議論が沸く。討論の最中に夕食を濟ませ、30種に依る觀望の外に、特に子午儀に依る時刻の觀測の見學があつた、幸ひ快晴にて一同大いに満足して21時頃辭去する。

24日山本先生は北海道へ出張、來月6日歸洛の予定。13日より17日まで山本、稻葉、公文の3氏倉敷の經緯度觀測へ。15日永らく天文臺で研究して居られた、太田氏は都合に依り歸郷された。19日より22日まで松山高校の土居氏來臺見學。(星見山人)